

Heartlogic選書

「シャンドライの恋」が 結んだ二人

インターネットが生んだ、ある出会い



<http://www.heartlogic.jp/>

はじめに

この文章は、私のブログ「Heartlogic」に、2008年1月に掲載した文章を元にしてしています。

「シャンドライの恋」が結んだ2人：インターネットを通じての恋愛・結婚（前・後編）

http://www.heartlogic.jp/archives/2008/01/2_11.html

http://www.heartlogic.jp/archives/2008/01/2_12.html

「普通の人」の人生の岐路に、インターネットが大きな役割を果たすことがあるよね、というレポート記事のひとつでした。当時、ネットを通じた恋愛・結婚というのは特別に珍しいことではなくなっていました。それでも出会い系サイトのトラブルがたびたび報じられたりして、ネットの印象はそれほど良いものではありませんでした。

そこから考えると、4年後の今では、ずいぶんとネットの印象は前向きなものになったように感じます。TwitterやFacebookの流行でコミュニケーションのあり方が大きく変わり、またマスメディアでの扱いもガラッと変わったことが大きな理由でしょう。

今回、Appleの「iBooks Author」のテストとして、過去のこの記事が電子書籍化してみました。電子「書籍」の文章としてはごく短いものですが、お楽しみいただければ幸いです。

登場するお2人の名前は仮名です。貴重なお話をお聞かせいただき、ありがとうございました。

2012年1月 小林祐一郎

「シャンドライの恋」が 結んだ二人

授業で作った「自己紹介の

ホームページ」から始まった

「就職氷河期のど真ん中でしたね」と、重久さんは当時を振り返って苦笑した。1998年、ゲーム専門学校からゲームメーカーを目指して就職活動をしたが実らず、卒業後はフリーターとして生活することとなった。同級生でゲームメーカーに就職できたのは、わずかに1人だったという。

アルバイトを転々として暮らすかたわら、重久さんは趣味でホームページを作り始めた。HTMLは専門学校で習っていた。授業で作った「自己紹介のホームページ」をベースに、少しずつコンテンツを増やしていった。

メインのコンテンツは、自分が観た映画の感想。重久さんの好きな映画は、いわゆるミニシアター系と呼ばれるもので、メジャーではない作品が多い。

サイトをリンク集に登録したりもせず（当時「SEO」という概念はなく、アクセスを増やすにはYahoo!のディレクトリなどリンク集への登録が最も有効だった）、存在を知っているのは仲の良い友達ぐらいという、こぢんまりとしたものだった。「（アクセスを増やそうとかは）特に考えていなかったですね。映画を観た記憶を整理するために、ホームページの形にしたかったので……」。

「シャンドライの恋」

1999年、神戸に住む大学生だった智子さんの家に、初めてパソコンがやってきた。学校でパソコンを使ったことはあったけれど、いくらでも自由に使える環境は初めて。嬉しくて。毎日いろんなサイトを探していた。

智子さんの趣味は映画鑑賞で、特に「ミニシアター系」と言われる作品が好き。よく映画の作品名で検索し、いろんな人の感想を読んでいた「自分が観た映画の、他の人が書いている感想を読むのが楽しくて。作品名で検索すると、いろん

な人の感想が見つかるのが面白いですよ。あ、こんなふう
に観た人もいるんだー、って気づくことがあったり」。

ある日、智子さんは「シャンドライの恋」という作品名で
検索した。「シャンドライの恋」は1998に公開されたイタリ
ア映画で、政治活動をしていた夫が逮捕され、アフリカから
イタリアに渡った主人公の黒人女性・シャンドライと、シャ
ンドライが住み込みで働く屋敷の主人であるイタリア人音楽
家・キンスキーとの関係を中心に描くイタリア映画だ。

キンスキーはシャンドライに想いを寄せるようになるが、
シャンドライの心にはずっと強い夫への想いがある。全編を
通じて台詞は少なく、かわりに音楽が流れる。大ヒットこそ
していないものの、どこの映画レビューサイトでも評価の高
い作品だ。

検索で見つけたのは重久さんが書いた感想のページだっ
た。重久さんは特にリンク集への登録などはしていなかった
けれども、ロボット型検索エンジンにはクロールされていた
わけだ。

初めてのメール

重久さんはキンスキーに感情移入しながら観ていた、切な
かった、というような感想を書いていた。とくに深く掘り下
げた批評でもないし、これといって技巧を駆使した文章でも
ない。でも、深く心打たれたことをシンプルに素直に表現し
た感想は、智子さんの気持ちのどこかを刺激したようだ。

重久さんの感想を読んで、智子さんは、そのホームページ
の作者（つまり重久さん）にメールを書きたくなった。顔を
知らない他人にメールを出したのは、それが初めてのこと
だったという。

智子さんのメールは「私も観ました。よかったですねー」
といった内容。ハンドルネームとして愛犬の名前を名乗って
いた。重久さんも、メールありがとうございます、程度の返
事を出した。

2人ともそれほど深く語り合いたいマニア気質ではなかつた
ので、わりと会話はあっさりとしたものだった。インター
ネットの力によって共通の趣味を持つ2人が出会えたわけだ
が、この時点で、結婚に至るような特別な関係になる気配は
全くなかった。

サイトで一方的に近況を知っている

サイトを運営していて、重久さんは智子さんのような読者からのメールを何度か受け取ったことがある。でも、いずれの場合も1、2回でメールのやりとりは途切れてしまったようだ。ただ智子さんとの場合だけは、途切れなかった。

とはいえ、2人のメールのやりとりは極めてスローペース。数か月に1回、時には1年近くもインターバルがありながら、忘れた頃にメールが届く、という関係が続いた。間が開いたときにメールを出すのは、たいてい智子さんの方だったという。

一般に、メールのやりとりは手紙よりもスピード感が要求され、数週間とか数か月といった単位で間が開いてしまうと、どうも気まずくてメールを書きにくくなってしまうものだ。重久さんもそう思ってメールを書けないことが多かった。一方で智さんは、そういうことを気にしなかった。

「こっちでは（サイトを見て）近況をいつも知っていますから、長い間連絡をしてないという感じがあまりなかったですね」と智子さん。メールの内容は、だいたい最近観た映画の話が中心。重久さんにとっては思い出した頃にメールが来

る感じの、智子さんにとってはいつも見ている人にたまに声をかけるような感じのやりとりが、数年の間続いた。

重久さんは東京出身の東京在住で、智さんは前述のように神戸。知り合っても気軽に会える距離ではない。このままメル友として永遠に続きそうな2人の関係は、ちょっとしたきっかけと思いつきから、新展開を迎える。

お父さんの単身赴任がきっかけで、

東京で会うことに

2人の関係が少し進展したのは、智さんのお父さんが横浜に単身赴任したのがきっかけだった。

お父さんに会いに行くついでに「会いませんか」と智さんから誘い、2人は会うことになる。2002年のことだった。この時、付き合うことになるかも？ といった予感や期待は特になく、ただ「近くに行くから、ついでに会ってみようかなと思って」というだけだった。

本名や携帯電話の番号を交換し、渋谷で待ち合わせて映画を観ることになった。そのとき、運悪く智さんの乗った電

車がトラブルを起こし、待ち合わせに間に合わなくなってしまふ。その連絡を受けたとき、重久さんはすでに渋谷駅にいたのだが、そういえばお腹が空いたな.....と思った。

急いで待ち合わせの改札口に駆けつけた智子さんは、改札前の売店でパンを頬張っている重久さんと目が合った。ふたりの初対面は、そんな感じだったようだ。

その後は、予定どおりに映画を観て、普通に別れた。そのときに観た作品は「ふたつの時、ふたりの時間」。特に何もなかったのは予定どおりのことで、特にパンがどうだったということは、なかった、らしい。

ネットで知り合った人と実際に会うときには、それまで抱いていたイメージと実際の人物との間にギャップを感じてしまうことも多いものだが、智子さんによると、重久さんの初対面の印象は「ホームページのトップにあった似顔絵のイメージ通りで、違和感ありませんでした」。その似顔絵も、学校の授業で（自己紹介のホームページだったので）描いたものだった。ちなみに、その似顔絵を見たいと頼んだのだが、ディスククラッシュで紛失してしまったとのことで、見せてもらえなかった。

Web製作を仕事にする

学校の授業ではホームページを作るのを「ぜんぜん面白いと思わなかったんですが.....」という重久さんだが、趣味のサイトを続けていくうち、Web制作が面白いと感じるようになっていく。

Webの仕事をしよう、という目標を決めた重久さんは、2003年から派遣社員としてWeb制作の仕事に就き、その後多少の回り道をしつつも、その派遣先の関連企業に契約社員として入社した。現在は制作チームを統括するディレクターとして活躍している。

「じゃあ、一緒に住む？」

いちど会ってからの重久さんと智子さんは相変わらず、途切れず進展せず、のスローペースな付き合いが続いた。智子さんは重久さんのサイトから近況を知っていて、時々メールをする。そして、たまに機会があったら会って映画を観たり、食事をしたり、といった関係。一般的にはそれを「デート」と呼ぶのではないかと思うのだが、当人間では、そういう意識はなかったという。

2人が明確に付き合うことを意識したのは、2005年になってのこと。智子さんの東京行きや重久さんの関西出張が重なって頻繁に顔を合わせる時期ができた。その頃にはいつのまにか、連絡手段は携帯メールが主になり、やりとりのペースも上がっていた。

大阪のとあるレストランで食事をしていた時、智子さんは自分の将来について、相談半分。愚痴半分で話していた。

智子さんは大学を卒業してお母さんの仕事の手伝いをしていたが、家を出て一人暮らしをしたいと考えている。でもお金がない。仕事を変えて東京に行くのもいいかな……。

といった話を聞いて、重久さんは「じゃあ、一緒に住む？」と言った。

大胆な告白！ だが、その場の空気としては大胆なことを言った感じではなく「いやあ、ごく自然な流れで、当たり前な感じで言ったんですよ」と、重久さんはサラリと言った。智子さんも頷いた。

「付き合っている」と確認し合わなくても、近くに行くたびに会うという関係は明らかに特別なものだ。お互いに、感情の下地のようなものは十分できていたのだろう。

智子さんはその場ではイエスともノーとも答えなかったが、帰ってからあらためて、重久さんについてじっくりと考えたという。「(重久さんについて)身近な存在として考えるようになって……、悪い人じゃないなあと思いました」。

後日、2人は話し合った結果、付き合いましょう、結婚を前提として付き合っ、東京で一緒に住みましょう、と決めた。ただし、いきなり家を出たり同棲するのではなく、結婚に向けて普通の手順を踏み、互いの両親の理解も得たうえで、そのようにしましょうと。

「ネットで知り合った」に驚かれる

智子さんはまず、横浜のお父さんと同居するようになった。お父さんに重久さんのことを話すと、はじめは「ネットで知り合った」という相手に「何だそれは？」と、否定的な反応をされた。だが何度となく3人で会い、話すうちに重久さんについて理解し、結婚も納得してくれた。2006年の1月に初めて重久さんはお父さんと会い、その年の5月に入籍。それまでのスローペースを巻き返すかのようなハイペースだった。

重久さんは現在、映画のサイトよりも、自分が所属するバスケットボールチームのサイトの管理に時間を取られているという。メンバー募集や練習試合の相手募集をしているので、同じ趣味をお持ちの方はサイトを見たことがあるかもしれない。

智子さんのような形でネットで知り合った人と会うのは「最初で最後ですね」と重久さんは言う。もちろんバスケットボール仲間として、だと話は別だろうが。

一方で智子さんは、パソコンを始めたばかりの頃に「ご近所さんをさがせ」というサイトを利用して、数人と会ったことがあるそうだ。が、これといって頻繁に会うような仲にはならなかった。重久さんだけが、なぜか特別だった。

おわりに

お話をお聞かせいただいたお2人に、あらためて感謝を。今度なにかご馳走します。

そして、今日もネットのどこかの誰かに向けて何かを書き続ける人たちと、ちょっと気になる知らない誰かにメールやメッセージを送ってみようかな.....と思ってみたりしている人に、ささやかながらエールを。

小林祐一郎

<http://www.heartlogic.jp/>